

平成30年度 第3回インクルーシブ教育(支援児包容教育)推進委員会 議事録

□開催日時：平成30年3月12日(火) 14:30 ~ 16:40

□開催場所：駅北庁舎 会議室1

□出席者(敬称略)

- ・委員：宇野宏幸 柴田勇夫 廣瀬和信 渡辺裕之 奥田紳二  
保母朋子 西村育子 則武里香 水野恵美子 高木貴代子  
瀨瀬育恵 天野智恵子
- ・事務局：渡邊教育長 鈴木副教育長 木股次長、南谷美和 井口裕子  
小栗妙子、安田孔美

1 あいさつ

教育長あいさつ

2 検討内容

(1) 特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業 指定校の取組

【多治見市立共栄小学校の取組について】

多治見市立陶都中学校 丹羽 紀一特別支援教育主幹教諭より説明  
丹羽主幹教諭は、共栄小学校を兼務  
昨年度の取組成果を共栄小学校へ波及する

【委員意見】

○取組について

- ・障害の有無にかかわらず、子どもたちが楽しく過ごすということを考えたい。
- ・楽しい授業は、保育園、幼稚園における保育とつながるところがある。
- ・子どもはよりよくなりたい、人の役に立ちたいという気もちがある。  
保育でも、主体的に自分から行動し、できたという喜びを味わえるようにしている。
- ・障害があるから我慢をするのではなく、自信をもって取り組んでいるところがよい。
- ・市の施策が活かしている。
- ・「ユニバーサルデザインの授業づくりとアクティブラーニングの融合」の取組が  
丹羽特別支援教育主幹教諭をキーパーソンとして広がった。
- ・共栄小学校の授業スタイルが変化した。地域の学校にもじわじわと広がるとよい。
- ・生き生きと授業に向かう姿は、あるべき姿。
- ・障がいのある子・・・彼らの学び方に合っているという環境を用意する必要がある。  
この環境をつくるのが先生、学校の役目である。
- ・本取組は陶都中学校が実践し、その成果を小学校に波及させているところに意味がある。全体的に小学校では手厚い支援があるが、中学校では特別支援教育への

理解が進んでいないという傾向がある。陶都中学校で重点を置いたUD化、アクティブラーニングの取組を波及させているところがよい。

○ 今後に向けて

- ・ いじめ、不登校の対応が急務である。担任任せにせず、担任が抱え込まないような体制を整備する必要がある。
- ・ 専門家の助言を受け、教職員の見立てる力を向上させるとよい。  
特別支援教育主幹教諭、特別支援教育コーディネーターが中心となって進めるとよい。対応については、分類するとよい。
- ・ 授業に参加することが困難な子に対して取り組んでいることを、市内学校で共有するとよい。  
例えば、陶都中学校が実践している電話当番、フェイスタイムを使った参加等。
- ・ 文科省委託事業は本年度で終了だが、これまでの取組を市内へ波及させていくとよい。

(2) 基本施策4「就学先決定の仕組みと教育支援の充実」について

③ 就労まで見据えた本人、保護者への情報提供について

【事務局説明】

- ・ 作成したリーフレットについての説明
- ・ 保護者様が就学相談をしやすいようにというねらいを込めて作成

【委員意見】

- ・ 就学先決定の流れが分かる。保護者が見通しをもつことが大切。
- ・ 中学校の進学等、保護者にとっては就学先決定を悩む。本人、保護者を中心に就学先決定ができるとよい。
- ・ 通級を利用する子どもの保護者を見ていて、通級を考えるときにも相談の窓口を知ることが必要だと感じる。
- ・ 就学先決定の流れが分かりやすい。  
「学びの場」にある「居住地校交流」は課題がある。小学校においては交流はあるが、中学校における交流は難しく、なかなか進んでいかない。実施するメリットはあるが、難しい。  
→ 居住地校交流の取組の充実を図る必要がある。
- ・ 居住地校交流については、意図的に仕組むことが必要。
- ・ 陶都中学校、共栄小学校、精華小学校、東濃特別支援学校との居住地校交流は大変よかった。保護者同士の顔がつながる機会ともなった。  
→ よい実践を広げるとよい。
- ・ 居住地校交流では、何を交流するのかを、詰める必要がある。また、中学校では日程調整も難しい。

- ・多治見市は就学先決定の仕組みが整っている。支援学校を仕方なく選択するというケースもある。
- ・年中から就学指導をするが、話だけでは分かりづらいところがある。リーフレットを活用したい。
- ・このリーフレットを中学校でも使用し、就学先決定の仕組みについて理解してもらいたい。
- ・分かりやすく、優しい感じがする。保護者が準備しやすい。

○個別の教育支援計画にかかわり、モニタリングについて

- ・学校では作成時、評価記入時ぐらい。12月に個人懇談があるので、懇談時にも内容の確認をする。
- ・福祉就労の場では、モニタリングを年3回実施。

→ 個別の教育支援計画のモニタリングについて現状把握をする必要がある。

【今後の訂正について】

- ・表紙に2019年、インクルーシブ教育の文言を入れる。
- ・年間の見通しと分かるように「一年の流れ」を加筆。
- ・放課後デイサービスの記述の訂正をする。
- ・相談窓口の電話番号を記載する。

### 3 報告内容

(1) 基本施策3「教職員の専門性の向上を図る研修の充実」

② 特別支援教育コーディネーターの専門性の向上

【事務局報告】

- ・年間の研修と、第5回特別支援教育コーディネーター研修会におけるリーダー実践報告について

【委員意見】

- ・市の働きかけで、特別支援教育に携わる仲間を増やす取組となっている。
- ・リーダーの先生方は、いいところに視点を置き実践をしている。
- ・今後の人財育成の場となる。若手教員が増え、校内人事の影響も受けるが、人財育成のためのシステムを整えることができた。
- ・経験学習をとおして学んでいただいた。生きた学びとなっている。
- ・特別支援教育コーディネーターの学び合いで、コーディネーターが育つ。
- ・持続可能な学びがある。

【今後】

- ・リーダー研修会を継続し、内容の充実と定着化を図る。
- ・経験学習を進めるにあたり、特別支援教育コーディネーターリーダーが今後のビ

ジョンと描くためには、先を見据えた情報提供と助言が必要。  
→今後も兵庫教育大学 宇野先生のご指導を依頼する。

(2) 基本施策5「一貫した支援の取組」

② スマイルブックを活用した理解と支援の共有

【事務局報告】

- ・平成30年度たじみスマイルブック引継ぎ会の実施について
- ・たじみスマイルブック活用セミナー実施予定について

【委員意見】

- ・引継ぎ会の様子を見て、活用している方と、書き方が分からず困っていらっしゃる方がいた。活用については、今後取り組みたい課題である。
- ・中学校で不適応が起きたとき、スマイルブックを読み、過去の様子を知ることが大変役に立った。学校においてもスマイルブックの活用を進める必要がある。
- ・活用セミナーには、保護者として是非参加をしたい。  
SOSを出せるように考えた支援は、小学校でも中学校においても必要であった。過去の支援グッズを入れていくとよいと感じた。  
→今回は試行的に実施する。そこで、今後は、ライフステージに応じた活用セミナーを企画したい。
- ・通級指導教室でも、保護者に開示を求めることがある。こうやったらうまくできるという引継ぎをし、保護者の不安を解消したい。

【今後の課題】

- ・ライフステージに応じたスマイルブック活用セミナーの開催
- ・多治見スマイルブックの理解啓発が必要

(3) 基本施策6「諸機関との連携強化」

① 医療、保健センター、福祉との連携の強化

【事務局報告】

- ・12月、2月に実施した多治見市民病院における講演会について

【委員意見】

- ・今後も継続できるとよい。
- ・中野先生、岡本先生のご協力が得られるのは大変有難い。
- ・文部科学省委託事業でも話題になったが、医療から見立てにかかわる助言をいただき、教師の気づきと適切な対応を増やす。

- ・子どもたちが、楽しく人生を過ごせるようにしていきたい。一人では生きられない。子どもたちの将来の生活に責任をもち、子どもたちが人生を全うできるようにする。
- ・多治見市の取組を知ることができ、よい機会となった。特別支援教育コーディネーター研修会等、特別支援学校職員が参加する等特別支援学校職員との交流をすることで、互いの専門性向上につながるとよい。
- ・就労支援については、職員の専門性の向上が必要である。
- ・色々なお立場の方の話を聞く機会となった。
- ・インクルーシブ教育が定着してきている。当たり前になるとよい。
- ・2008年支援員として勤務していたときに比べ、すごく変わっている。理解が広がっており嬉しく思う。先生方が一丸となって、みんなが楽しく学んでいけるようにしていきたい。
- ・スマイルブックは母子手帳の続きとして活用できるとよい。みんなが使っていけるようなものになるとよい。
- ・先生方が頑張っている、子どもたちのことを思っていることを実感した。
- ・子どもたちの困りごとは多様であり、色々なケースがある。特別支援教育コーディネーターを中心に、学校は頑張っているところである。  
学校見学会が3回実施されるなど、連携をとってはいるが限界もある。  
→ 学校への負担軽減を検討する必要あり。
- ・困ったり、悩んだりしたときに相談できる場所が必要。
- ・通級担当として、今後も連携・つながりを大切にしたい。
- ・子どもたちが笑顔で過ごす・・・このことが基本にある。  
助けを求めてもよいということを分かって、行動できることが自立。  
指導、支援にかかわり子どもの姿からどうするとよいのかを考えるとよい。
- ・幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校の連携が強化されるとよい。
- ・インクルーシブ教育が多治見市全体の仕組みとなっていることがつよみである。  
指導、支援の充実に留まっていない。
- ・今後も通常学級での特別支援教育を広げ、インクルーシブ教育を推進し、真に実現をしていくことを期待する。
- ・確かな実績が積み上がっている。多治見市の取組が参考になっている。  
地域へ広がっていくことを期待している。
- ・今後も多治見市のインクルーシブ教育が益々推進されることを期待する。

## 5, 教育委員会 挨拶 木股一朗次長より